

◎特集1

「おとぎの国の王様」 武井武雄

創造の翼を広げて、いつか見た夢幻の世界へ

岡谷市出身の童画家、武井武雄の作品を紹介する

イルフ童画館は、今年で開館10周年を迎えました。

節目の年を記念して、

今月号では武井武雄を特集します。

大正から昭和にかけて、

童画や版画、玩具の創作など幅広い分野で

日本を代表する芸術家として活躍した武井武雄。

時を超え、世代を超えて

今なお多くの人々を魅了する

武井の世界に、

あらためてふれてみませんか。



みなと保育園 塔屋の上の風見鶏
「武井武雄画断Ⅰ あるき太郎」(昭和2年)より

武井武雄の原点

—妖精ミトと過ごした日々

武井武雄は明治27年、平野村（現岡谷市）の村長・武井慶一郎、さちの一人息子として誕生しました。幼少の頃は身体が弱く、家の中で詩や俳句などに親しんで過ごしていたそうです。同年代の友人と遊ぶ機会が少なかった武井は、いつしか遊び相手を求めて妖精「ミト」を創り出し、空想の世界で遊ぶようになりました。ミトは枕元や広い庭先など、会いたい時にどこへでも来てくれたりと振り返っていません。この幼少体験こそが、のちの空想世界を自在に描き出す武井芸術の原点となっているのです。また、天性の芸術的才能にも恵まれ、すでに5歳の頃に『エ兆金』と題した豆本を制作。小学校の作文に「大きくならたら絵描きになります」と書くなど、早くから将来は画家を夢見ていたのです。

絵描きを志して

—諏訪中学校から東京美術学校へ

明治41年に諏訪中学校（現諏訪清陵高校）へと進学後、級友らと洋画研究を目的に「椰子の実会」を結成。星蹄と号し、作品の品評やスケッチ旅行など本格的な活動を重ね、東京美術学校（現東京芸大）への進学を志しま



7歳の頃の毛筆画

す。しかし、

両親は名家の跡取り息子の美大進学に大反対。当時は芸術家への理解も低く、絵描きなどとてもないという意識があったようです。思案した父親が知人の島木赤彦に相談したところ、「本人のやりたいことをさせよ」と諭され、ようやく進学が許されました。その後、東京での二年間の浪人を経て、大正3年に東京美術学校の西洋画科へ入学。岡谷で培った創造力の翼をはばたかせ、武井武雄の世界を開花させて行きます。



中学卒業時の文集

童画家への道

—子どもこそ、本物の芸術を

大正8年に東京美術学校を卒業後、大正10年から子ども向け雑誌に絵を描き始めますが、その頃挿絵は童話の添え物と軽視される傾向にあり、武井自身もアルバイトのつもりでいたようです。しかし、しばらくすると子どもが最初にふれる芸術は絵雑誌の挿絵であり、その絵こそ魂をふるわせる作品でなければならぬ—との思いを強くします。そして、自分の一生をかける仕事として、子ども向けの絵画に取り組むことを決意するのです。

翌大正11年、大正デモクラシーの波に乗り、今までにない芸術性の高い絵雑誌『コードモノクニ』が東京社から創刊されます。編集長の和



「夢のお客さま」（1923年）



「コードモノクニ」
創刊号 表紙



「イソップモノガタリ」
表紙（制作年不詳）

田氏に認められた武井は、企画段階から参加し、創刊号のタイトル文字と表紙絵を担当。以後、童話や詩なども創作し、雑誌の重要な担い手として活躍します。また、子ども用の絵画がそれ自身で一つの作品となるよう、大正14年に銀座の資生堂で初の個展「武井武雄童画展」を開催。このとき武井により日本で初めて「童画」という名称が用いられました。昭和2年には純絵画としての童画の独立を目ざし日本童画家協会を設立。初山滋、岡本帰一など、当時の児童文化の一翼を担うメンバーがその名を連ねていました。

イルフトイスの創作

武井は子どもが最初にふれる玩具にも情熱を傾けました。自らがデザインした玩具に、「古



「地上の祭」表紙 (1938年)

さらには制作範囲は版画にも及びました。昭和10年に版画仲間との年賀状交換会「榛の会」を主催したほか、日本版画協会会員となった昭和19年からは毎年協会展に作品を出品。また、エッチングによる銅版絵本「地上の祭」は、素材から技法まですべてにこだわり抜いた豪華画集で、武井作品の中でも最高傑作の一つだといわれています。

このように、童



イルフトイス「お馬車」とその原画



い」という言葉をさかさまにして「新しい」という意味をもつ「イルフ」という造語を付け、「イルフトイス」として制作。昭和4年に日本橋三越で「イルフトイス展」を開催し、想像力豊かな玩具や手工芸品50点を出品。昭和9年まで年に一度開催され、それ以後は武井武雄主催創作玩具展として毎回テーマを決める形式で行われました。

武井と版画

画を芸術の域にまで高めながら、多彩な分野で武井が精力的に活動している間にも、日本は第二次世界大戦へと突入。日々の暮らしに戦争の暗い影が忍び寄っていたのです。

岡谷に灯した文化の明かり

昭和20年4月、戦況の激化にともない、武井は妻と子を連れて東京から岡谷へ疎開。その直後に東京大空襲が起こり、家も作品も貴重な資料もすべてが灰となる悲劇に見舞われます。さらに武井自身が流行病にかかったりと、精神的にも身体的にもつらいことが度重なった年でした。しかし、そんな失意の底にあっても、武井は文化的な活動に意欲を燃やしました。岡谷に文化の明かりを灯そうと「双燈社」を結社。西堀の実家に近い広円寺を主な会場に、音楽鑑賞会や映画上映会、版画講習会など様々な企画が行われました。後年、ここに参加した人々が版画や音楽など多方面で活躍し、諏訪地域の文化を牽引していく存

「双燈社」に学ぶ——武井先生の面影

18歳で参加した「双燈社」の版画部会では、版画はもちろん、武井先生に生き様についても教えていただいたように思います。先生はあらゆることに全力で取り組み、万物の長所を見る方でした。「すべてのものいいところがある。それを見出せるようになりなさい」、「死ぬ瞬間、いい人生だったと思えるよう精一杯生きなさい」——今でも先生の教えが私の心の灯火となって、人生を照らしてくれています。

岡谷市 北村さん

(昭和32年頃、「双燈社」の版画部会に参加)

在となるなど、武井が灯した文化の明かりはその後も輝き続けていくのでした。

54歳での再出発〜命尽きるまで

終戦後の昭和23年、少しずつ童画の仕事が再開できるようになり、武井は単身東京へ。翌年には妻と長女を呼び寄せ、板橋に「一擲庵」と名付けた居を構えます。この年初めて木口木版に挑戦するなど、人生の中盤を迎えても、武井の芸術への意欲はおとろえませんでした。

その後も活躍は続き、「観察絵本キンダーブック」など多くの児童雑誌に携わります。昭和37年、68歳で戦前とは異なる新たな日本童画家協会を結成し、毎年一度の協会展に作品を発表していきます。81歳の昭和50年には、童画の代表作を載せた「武井武雄作品集I (童画)」がドイツのライプチヒで行われた「世界で最も美しい本」国際コンクールでグラプリを受賞します。

「俺よ老いるな」と自分を戒め、いつでも新しいものに挑戦し、限りない愛情を込めておとぎの世界を紡ぎ出した武井武雄。心筋梗塞により88歳で人生に幕を下ろす瞬間まで描き続けた作品は、見る人すべてを魅了します。



「ハメルンの笛吹き」(1966年)

岡谷に響く武井の芸術

武井が亡くなったあと、作品は長女の武井三春さんが所有・管理していましたが、三春さんの逝去により、作品と著作権のすべてが岡谷市へと寄贈されました。三春さんは生前、「父の作品を故郷へ帰したい」との想いを口にしていたといえます。

また、イルフ童画館を中心に、中央通りなどの街路灯、丸山橋の欄干、保育園・小学校などの公共施設や、市内のいたる所で武井の作品を目にすることが出来ます。おとぎの国の住人たちが時を超え、今も樂しげに暮らしているのです。

岡谷市ではふるさとへと帰ってきた作品や著作権を市民のみなさんの貴重な財産として大切に守っていくとともに、それらをまちの彩りとして、これからも「童画のまちづくり」を進めていきたいと思っています。みなさんもあらためて、身近な存在である武井武雄の魅力を再発見してみませんか。



「ふしぎな村」(1967年)



「月で遊ぶ」(1959年)

イルフ童画館開館10周年

イルフ童画館では、今年一年を5期にわけて武井武雄の生涯を紹介する特別展を企画し、現在は「新収蔵作品展 武井武雄の生涯II」を開催中です。また、新設の開架図書コーナーでは、すでに絶版となった絵雑誌や「世界で最も美しい本」グランプリを受賞した「武井武雄作品集I(童画)」などが手に取って読めるようになりました。今までガラスケース越しに見ていた本に直にふれて、武井武雄の息吹を感じてみてはいかがでしょうか。



まゆみ園の陶板壁画と
原画の「みずは、おいしいな」(1967年)



世界で一番美しい本「武井武雄作品集I(童画)」
など貴重な本が手にとって読めるようになった
開架図書コーナー



刊本作品

あくなき探求心—武井芸術の最高峰

武井の芸術への挑戦ともいうべき探求心により生まれた刊本作品。昭和10年の「十二支絵本」にはじまり、全139作を制作しました。絵・文字・装幀・函、印刷方法に至るまでこだわり、一作ごとに素材や技法が変えられています。当初は玩具の一つとして捉えられていたようですが、次第に手のひらサイズの本の中に武井芸術のすべてが注がれた、作者入魂の作品へ。造本芸術を極めた「本の宝石」と絶賛されています。

刊本作品は原則として300部限定で制作。本にはナンバーが押され、「親類」とよばれる友の会員だけに実費で配布されました。幻の美本を求めて友の会への入会を希望する人はあとをたちませんでした。会員は300名のみ。そのため、「我慢会」とよばれる友の会入会を待つ人々が常時200名以上いたそうです。

